

2012年7月12日東北学院大学FDシンポジウムの報告
これからの大学における教養教育のあり方
- 本学教養教育改革の意義と課題 -

・ 報告と発議

1. 今回の教養教育改革が指すもの
齋藤誠（学務担当副学長）

1. 改革の背景

(1) 「組織的教育」の要請

2009年 「学位授与の方針」の制定

2010年 「全学教育課程委員会」設置

2011年 教養教育の全学的検討開始

(2013年 新カリキュラム実施予定)

(2) 「学士課程」としての大学教育

教養教育改革を通じて、全学部が教養教育に応分の責任をもつ体制づくりを進める。

(3) 「学士力」の養成

「学位授与の方針」をふまえ、大学として養成すべき「学士力」を検討する。

(4) 「学士力」としての汎用的力

「汎用的力」(「学士力」の中心；主体的に学び、考え、不断に変化する状況に的確に対応できる)の観点から教養教育を見直す。

2. 改革の成果

(1) 「教養重視大学」にふさわしい教養教育

教養教育科目の授業科目数

全学部学科で38科目(語学、スポーツを除く) (東北福祉大学は35科目)

教養教育科目からの卒業所用単位

全学部全学科で40単位(語学、スポーツを除く) (東北福祉大学は9~12単位以上)

(2) 「学位授与の方針」との関連の明確化

学位授与の方針	教養教育
よく生きようとする態度	第1類「人間的基礎」
知的活動を続ける技能	第1類「知的基礎」
専門知識と認識・思考	
広く多様な視点からの認識・思考	第2類
課題解決のための学習成果の活用	

新教育課程における教養教育科目の授業科目

区分	授業科目	設置	必修・選択	卒業所要単位	
教養教育科目	第1類 人間的基礎	聖書を学ぶ	全科目	必修	10単位
		キリスト教の歴史と思想			
		キリスト教学A(キリスト教と倫理)		1科目(2単位) 選択必修 4単位まで卒業 単位として認定	
		キリスト教学B(キリスト教と宗教)			
		キリスト教学C(キリスト教と文化)		選択	
		キリスト教学D(キリスト教と現代社会)			
		市民社会を生きる		選択	
		地球社会を生きる			
		科学技術社会を生きる			
		キャリア形成と大学生活			
		クリティカル・シンキング			
	数理的思考の基礎				
	統計的思考の基礎				
	科学的思考の基礎				
	情報社会の基礎				
	メディア・リテラシー				
	読解・作文の技法				
	研究・発表の技法	10科目以上	学部学科の 指定による 科目区分・区分 名は学部学科が決 める	20単位 学部学科の決め 方により「人間的基 礎」「知的基礎」の 単位を含めてもよ い	
	哲学				
	芸術論				
	歴史学				
	心理学				
	社会学				
	経済学				
	経営学				
	法学				
	日本国憲法				
環境の科学					
自然の科学					
健康の科学					
倫理学	10科目以下 全学共通とあわ せて20科目以内				学部学科の 指定による 科目区分・区分 名は学部学科が決 める
文学文化人類学					
現代の政治					
社会福祉論					
東北地域論					
先端の科学と技術					
情報リテラシー					
生命の科学					
地理学					
震災と復興(時限)					
その他(学部学科独自科目)					

「人間的基礎」と「知的基礎」をあわせて「TGベーシック」と通称する。

授業科目はすべて2単位

(3) 「基礎」教育の重視

「TGベーシック」…「基礎」教育を本学「学士力」養成の要諦に。

人間的基礎 = 倫理的汎用力 知的基礎 = 知的汎用力

卒業所要単位

人間的基礎 10単位 知的基礎 10単位

(4) 「基礎」教育の全学共通化

授業科目を全学部共通とする。

人間的基礎 10科目 知的基礎 8科目

授業内容を全学部共通とする。 主な到達目標の共通化（例として下表参照）

授業内容の全面的共通化は行わない。

授業科目	基本的考え方	主な到達目標
人間的基礎 市民社会を生きる	<p>市民社会という考え方が成立した歴史的背景を理解させ、市民社会が近代思想の所産であることを理解させる。</p> <p>市民社会という考え方に含まれる人間観・社会観・政治観の特徴を理解させるとともに、そこに内在する価値の衝突を理解させる。</p> <p>市民社会で生じている倫理的問題は、そうした価値衝突の結果であり、単純な解決策はないことを理解させる。</p> <p>市民として生きるために、そうした問題を自分なりに「考える」態度を養う。</p>	<p>市民という概念の成立について、その歴史的背景を説明できる。</p> <p>市民社会という考え方に含まれる人間観・社会観・政治観について、その概要を説明することができる。</p> <p>市民としての正当な主張がなぜしばしば対立を生み出すかについて、いくつかの例をあげて説明することができる。</p> <p>市民社会における倫理的諸問題に、意見を対立を理解しながら、よく考えて自分の結論を出そうとする意識を示すことができる。</p>
知的基礎 クリティカル・シンキング	<p>日常生活においてわれわれはいかに「よく考えていない」かを自覚させ、「よく考える」ことの重要性を理解させる。</p> <p>情報の袖手・整理・発信において、事実と意見を分けることの重要性を理解させる。</p> <p>よい証拠、よい論拠に基づいた主張によって説得力を高めることの重要性を意識させる。</p> <p>因果関係を推定するための方法を理解させ、しばしば陥る謝った因果関係の推定を避けることができるようにする。</p>	<p>クリティカル・シンキングの意味を理解し、「よく考える」意識・態度を示すことができる。</p> <p>「事実」と「意見」の違いを説明し、実際の情報について、事実に関する部分と意見に関する部分に分けることができる。</p> <p>主張に説得力をもたせるために有効な証拠・論拠とそうでないものを区別し、その理由を説明することができる。</p> <p>前後関係、相関関係、必要条件と因果関係との関係について、具体例をあげながら説明することができる。</p>

(5) 「基礎」教育と「建学の精神」

「建学の精神」をふまえた「基礎」教養

「よく生きる態度」の育成に向けて、キリスト教科目とその他の科目が協働

3. 改革の課題

(1) 教員の意識改革

「学士力」養成において教養教育が重要であるという意識

基礎教育・教養教育は、全学部の全教員が応分の授業担当をしなければ運営できないという意識

(2) 教育内容・方法の改善（基礎教育における授業内容・方法の確立、支援体制づくり）

(3) 教養教育を支える組織づくり（当面は「全学教育課程委員会」がP-D-C-Aを実施）

2. これからの大学と教養教育

北村勝朗（東北大学大学院教育情報学研究部教授）

(1) 2つの学習体験（学生に対する調査より）

専門的学習を志向する学習体験	拡散型学習を志向する学習体験
<ul style="list-style-type: none">・ 主として理系学生に典型的にみられる・ 入学当初から意識された専門性を追求する過程が4年間継続され、あるいは大学院へと継続されていく・ 背景には、継続的かつ系列的に深く専心して学ぶことによって目的とする学びが成就されるとする学習観が存在している・ それ故、継続性や系統性をもたず、専門との関連性も低い授業科目の履修に関しては低い意識づけがなされ、その結果、授業に対する評価も低いものとなる（「楽勝」「役に立たない」「ただの興味」「単位のため」「勉強という感じてない」）・ 教員との出会い、先輩からの学び、友人との関わりといった体験が、積み上げられて構築されていく学問体系のガイドラインとして位置づけられ、学習体験を支える形で存在	<ul style="list-style-type: none">・ 主として文系学生に典型的にみられる・ 多様なテーマを幅広く学び、教養として深めていくことに意義が認められる・ 専門教育と教養教育が区別なく共存する・ むしろ教養教育としての意義が高く評価される（「ものの見方を広げてくれる授業」「幅広く知っている方が」「学問横断的な授業を」「一般教養を増やして」）・ 学習体験も就職や部活動の手段として位置づけられ、大学生活そのものが通過点としての意味を帯びる

(2) 2つの学習体験に応じた評価が必要

(3) 専門教育との対比の視点（専門教育との対比の中で教養教育を明確にする～専門を深く系統的に学ぶ上で、今何が必要とされるのか、後に有用性を再認識するであろう必要性は何か）

(4) 後で役に立つ授業の視点（4年間の学びを経た時点で、「身になる」「血肉となる」「わかる」「理解が深まる」「積極的につかみとった」といった知識の修得の実感や「もっと勉強すれば」「もっと主体的に学べば」といった未修得の実感 学びの継続性、反復性、専心性）

(5) 新たな視点

専門教育の前に位置づけられるような内容（統計学、数学等の専門教育の基盤となる専門基礎的な授業の展開）

人文・社会・自然科学領域を横断する学際的領域の授業科目（学際的・総合的な授業の展開）

4年間継続して、徹底した語学トレーニングを展開する授業

本学の「総合基礎科目」の名称のうち、「基礎」は、「総合」は にあたるもの。

(6)結論

4年間という学びの過程という時間軸で変化する学習観
学習志向性という学びの目的の多様性の学習観
学習の質の方向性の学習観

3. 高校から見た今回の改革

柴田隆一（東北学院中学校・高等学校教諭）

1. 中等教育とのつながりから

中・高等学校学習指導料容量改訂のポイント

「生きる力」を育成

豊かな心や健やかな体を育成

知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視

大学では

人間的基礎教育・教養教育へ

知的基礎教育・教養教育へ

2. 「東北学院中学校高等学校」とのつながりから

中学校高等学校での教育目標 教養教育の中での深化

3. 保護者・生徒のニーズとのつながりから

教養教育によるわが子の変化 保護者の視点にも変化をもたらす（多様な視点）

. パネル討議

・ 新カリキュラムにおける教養教育の意義（加藤健二、教養学部人間科学科教授）

教育	目指すところ	必要なリテラシー	科目
大学・教養教育	<ul style="list-style-type: none"> よく市民、職業人に すぐれた学習者に 	市民リテラシー	TGベーシック、読解・メディア、科学・数学・統計、クリティカル・シンキング、法律・経済、倫理、キャリア教育
大学・専門教育	<ul style="list-style-type: none"> すぐれた学習者に すぐれた専門家に 	学問リテラシー	第2類教養科目、専門科目
大学院教育	<ul style="list-style-type: none"> すぐれた専門家に すぐれた研究者に 	研究リテラシー	

・これまで専門教育に偏っていたので、教養教育を見直し、バランスをはかろうという趣旨。逆に、教養教育に偏ると、ただの市民になってしまうことも。

配布資料を閲覧希望の方は教務部・皆川まで。

参考 「21世紀の教養と教養教育」(日本学術会議提言 2010年4月5日)

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-tsoukai-4.pdf>

報告者のコメント

学士力の養成の“見える化”

東北学院大学では、「人間的基礎」「知的基礎」の科目群を設け、「TGベーシック」と命名し、学士力の養成に取り組んでいることを打ち出す。

本学でも、さらなる“見える化”の作業が必要？

(「リエゾンゼミ」も“見える化”の一つ。総合基礎教育の中でも“見える化”？)

学士力を踏まえた「教養教育」

東北学院大学では、専門科目の基盤としての教養教育(「知的基礎」)と学際的・総合的な視点から考える力を身につける教養教育(「第2類」)を打ち出す。

本学でも、学際的・総合的な思考力の教養として、また専門教育の基礎として、「総合基礎科目」と命名。そのことが、受験生には知られていない(大学のホームページ等でもっとPRも...)

教養教育によって養成する人材像の明確化

東北学院大学では、学士力を踏まえて「良き市民」を養成と打ち出す。

ただし、「良き市民」だけでいいのか、「良き市民」で果たして受験生が集まるのか、「良き市民+専門家」を打ち出すことではないかという意見も出ていた。

「良き市民」は教養教育の原点 中教審『学士力の構築に向けて』では「21世紀型市民」と表記。

本学でも、総合基礎教育によって養成する人材像を明示必要？

態度・志向性の教育

東北学院大学では、態度・志向性の教育も検討されたが(ボランティア活動の単位化、社会の中の教育など)最終的には見送られ、今回の改革からは除外された。

本学では、「福祉ボランティア活動」「インターンシップ」「実学臨床教育」があり、しかも課外活動が盛んであり、態度・志向性の教育の下地がある。それらの教育内容・方法を体系的に示すことにより、態度・志向性の教育に取り組んでいることを打ち出すことが可能？

教養教育としての外国語教育

東北大学では、4年間継続した、徹底して語学トレーニングを展開する授業が模索されている(ただし、東北学院大学の今回の取組みにはあげられなかった)。

実践的で高度な外国語運用能力及び異文化・多文化理解の能力も、「21世紀型市民」の要件の一つ。

本学でも、4年間継続した外国語教育が必要？

教養教育としての保健体育教育

教養教育としての保健体育教育を論ずる意見も出てきているが、少ない。今後の課題？